

第6章

イノベーション

急速に進展するグローバル化の中で、地域・産業界・行政が環境の保全に努めつつ、経済を持続的に発展させるためには、絶えざるイノベーションが不可欠である。

そのイノベーション創出のためには、文部科学省産学官連携コーディネーターによる産業界、公的研究機関および大学等との連携が強く求められている。

この章では、このような視点から、「イノベーションを誘発する仕組み」および「イノベーションを創出するプロジェクト」に関する事例を紹介する。

イノベーション

イノベーションを誘発する仕組み

成果が続々、産産金学学大型連携

キーワード：大学ニーズ・地域中小企業・マッチング・試作・製品化

本事例の関係者

大阪大学他9大学等・
研究機関
摂津水都信用金庫
地域中小企業600社

文部科学省産学官連携
コーディネーター

産出総額1億円、信用金庫が社会貢献賞受賞

【要約】

コーディネーターは、平成14年、大阪大学を支援していた時に、「大学のニーズを中小企業の技術力で実現」という連携モデルを考案し、その仕組みは、これまでの活動事例集に掲載されてきた(*)。

この事例は、その後日談であり、7年間で試作・製品化は23種、産出総額は、1億円を超えた。

【きっかけ】

平成14年10月の大阪大学の体育館における産学連携マッチングフェア（地域中小企業による展示会）に次いで、平成16年4月ウェブサイトRS-Net（図1）による研究者ニーズへの対応に基づく試作・製品化プロジェクトを開始した際に、他大学や公的研究機関に門戸を開放した。

【段取り・プロセス】

●大産産学学連携△

RS-Net開設とともに、参加する大学等・企業が増加し、平成20年7月の産学連携マッチングフェアin 北大阪には、9機関・600企業が参加した。

これらの機関・企業は特段の協定を締結している訳では無いが、RS-Netとプログラム（仕掛け）が「要」となり、コーディネーターが深く関わりを持つことなくとも自走性の高い活動に成長してきた。

●信用金庫が社会貢献賞を受賞

平成19年摂津水都信用金庫は中央信用金庫主催の「社会貢献賞」表彰において産学官連携部門として第一号の表彰を受賞した。

受賞を機会に信用金庫内部におけるこのプログラムに対する見方も好意的になっている。

【成果・結果や活動後の変化】

●総産出額1億円に

最近、これまでの成果をレビューの結果、プログラム開始後の産品は23種、総産出額は1億円に達し、来年には大型商品の上市が見込まれていることが明らかになった。

(*) 事例H1 8p92 大学のニーズを産の技術力で実現
事例H1 9p82 Webで大学ニーズと産の技の融合



大連携大会で参加者を魅了したからくり

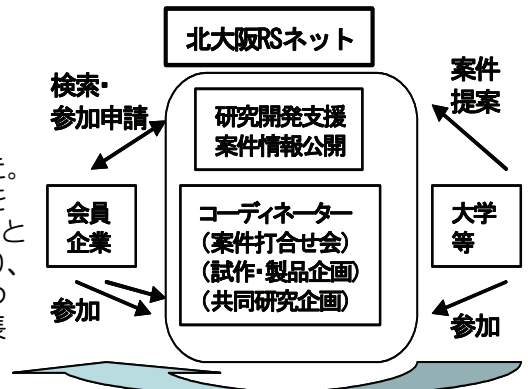


図1 北大阪RS-Netの仕組み

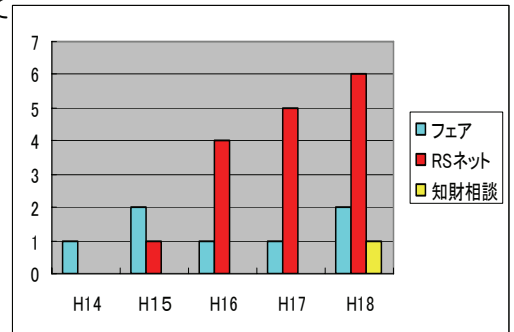


図2 RS-Netにより試作が増加
(縦軸は試作・製品化の件数)

大連携に至る流れ

平成14年10月
阪大体育館で
マッチングフェア
平成16年4月
RS-Net稼働
他大学等へも開放
平成20年7月
大学等・企業と
の大産学連携大会

成功の事例

金融“コーディネーター人材”とプログラムが鍵

●信用金庫担当者“コーディネーター人材”が課題の前捌き

このプログラムが長期に亘り円滑な運営がされている大きな要因は、信用金庫側にコーディネーター活動に従事する担当者が設定されていることである。

この信用金庫の担当者は、次項に記載のような大きなミッションを推進しつつ、日常的には、大学等と地域中小企業との間にあって、課題毎に大学等に持ち込むか、公設試験研究機関に相談する方がよいか、など、きめ細かく前捌きをいただいていることで、大学等のコーディネーターと補完的な活動となるとともに、中小企業の信頼性醸成に繋がっている。

●信用金庫担当者“コーディネーター人材”に明確なミッションとプログラムを

一般的に信用金庫・地方銀行など金融機関との連携は多くあるが、金融機関側のコーディネーター人材のミッションが「技術相談」「マッチング」など、一般的な業務とされ日常的に明確でないケースが多く見られる。

この大連携プログラムでは、コーディネーター人材の最大のミッションはRS-Netの運営であり、このような具体的な仕組みを連携の中に組み入れていることも、本件が長期に亘って継続している要因であると考えている。

イノベーション



大学との技術研修会

失敗の事例

この連携モデルの普及が思い通りに進まない

●学会発表・講演などで紹介、共鳴は得られるも普及は遅々として進まず

「大学のニーズを産の技術力で実現」というこのプログラムは学会発表・講演会で紹介すると、着目の意外性と具体的成果がでていることに注目と賛意が寄せられてきた。そして、資料の提供などを進めているが、実施に踏み切るケースは、未だ見あたらない。

ずっと、その原因を考え続けているが、次の項のような課題について、個々に考えてみたい。

●仕組みの普及・啓発に終始し、人材・資金・ニーズに視点が行かず

これまで続けている仕組みの紹介は、いわば、普及・啓発の段階に過ぎない。

今後は、当該地域におけるコーディネーター人材・運営資金の裏付・大学等のニーズの多寡などきめ細かく、事情を聴取・調査して、実践的に制度化の促進に取り組んでいきたい。

成功と失敗の 分かれ道

大学等研究者側のニーズを産業界のシーズと融合させる意外性もさることながら、金融機関側に分身的なコーディネーターがいたこと。

産学官連携の新たな展開に向けた提言

ものづくり・金融を介して中小との連携促進

●中小企業は「ものづくり」ができることが励み、そしてイノベーションへ

この仕組みのエッセンスは、中小企業にとっては「ものづくりの機会」が見えることであり、「ものづくり」は励みになるからである。

そして、T社では新製品の開発を産学連携で生み出すに止まらず、K大学との間で異業種の連携協議会を創設、研究会と併せて、社員の技術研修会も実施するまでに展開されており、「ものづくり」から「イノベーション」に展開している。

●大学等と中小企業との連携は金融機関などを仲介として

大学等が中小企業と直接に技術相談や共同研究の折衝をすることは、課題の内容や取り組みの変化のスピードなどギャップが大きく、地域の金融機関・中小企業団体中央会・公設試験研究機関など、平素から中小企業との接点を多く有している諸機関と連携して取り組む方が効果的であると考えられる。

☆コーディネーターの一言

プロジェクト設計の要諦の一つは自走性。コーディネーターがいなくなっても、活動が継続するようにヒト・カネの準備。モノは時々相談に乗ることで変化が出せる。丸7年経過した。10周年まで、頑張ろう。